

平成21年6月10日現在

研究種目：基盤研究（B）海外学術調査

研究期間：2006年度～2008年度

課題番号：18401014

研究課題名（和文）北米先住民諸語自然談話テキスト資料の体系的収集

研究課題名（英文）Systematic collection of natural discourse textual materials in languages of the First Peoples of North America

研究代表者 中山 俊秀

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

70334448

研究成果の概要：

本研究では、北米先住民諸語の自然談話のデータをフィールドワークを通じて体系的に収集し、そのデータを広い範囲の活用が可能なコーパス資料・語彙資料として整備した。これは、一方で、世界でも珍しい特徴が観察されながらも研究が未開発である北米先住民諸語・文化に関する研究を進める上で重要なデータ基盤となり、また他方で、消滅の危機に瀕する先住民言語の現地話者コミュニティでの言語再活性化活動にも重要な貢献となる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	4,700,000	0	4,700,000
平成19年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
平成20年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総計	13,200,000	2,550,000	15,750,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：人文学・言語学

キーワード：記述言語学、北米先住民、危機言語、テキスト資料、談話資料

1. 研究開始当初の背景

近年の言語研究においては、国際的潮流として、実際の言語使用に重心を置いた言語現象・言語構造の研究が広まりを見せている。それに伴い、自然談話資料から構成され言語使用の実態をよりよく捉えたデータベースの必要性が強く指摘されている。本研究はこの潮流と指向を一にし、文法研究、類型論研究の新しい展開の基盤を築くことを目指して計画された。

本研究は、調査研究の対象とする言語のいずれもが、消滅の危機に瀕しており、その記

録が急がれるべきであるにもかかわらず、世界的に見ても研究者が少なく、先行研究も非常に限られている点に特徴がある。本研究の対象とする諸言語は非常に複雑な形態法など類型論上興味深い特徴を持つ。そのような言語に関して実際の使用実態に近いデータを体系的に収集し蓄積することは、多様な言語事実に基づく言語研究を将来にわたって保障し、人間言語の真の特質の理解を深めるために不可欠である。

また、本研究が生むテキストコーパスに対しては、言語復興運動を行っている現地コミ

ユニティーからの期待も大きい。急激な社会変容の中で伝統言語の自然な使用の様子を記録することは文字通り年々難しくなっており、本研究が目指す自然談話資料を収集することは重要、かつ急務である。

2. 研究の目的

本研究の中核的な目的は、研究が立ち後れている北米先住民諸語（スライアモン語、ヌートカ語、ニティナト語、エスキモー語）の自然な言語使用を網羅的に捉えたテキスト資料を収集し、それらの言語の文法研究や人類学・民族学・歴史学的研究に供する研究資源として、また言語再活性化活動の資料基盤としてとりまとめることにある。

3. 研究の方法

本研究での談話資料収集は現地コミュニティーでのフィールド調査を通して行われた。資料収集にあたっては、特に収録ジャンルの面で幅広く体系的に行い、資料の総体が言語の自然な使用のあり方をできる限り忠実に反映したものとなるように努めた。音声記録は CD 音質でデジタル録音した。音声から書き起こしたテキストデータには、文法分析を加えデータベース化した。データベースは幅広いアウトプットに加工することが容易にできるようにそのフォーマットを工夫した。併せて、テキストにおける用法をもとに語彙データベースを構築した。

4. 研究成果

本研究で収集された談話資料収集、伝統的な物語（昔話、民話、神話）、伝統的な習慣や技術に関する説明、歴史的な出来事の解説など、広い範囲のジャンルと内容にわたっており、自然談話資料から構成され言語使用の実態をよりよく捉えたデータベースを構築することができた。収集されたテキストの音声データは音質の劣化のないデジタルフォーマットで保存し、長期にわたって安全に保存できるよう配慮した。書き起こしたテキストデータには形態素分析を加え、形態素による検索などが可能になるようにした。本研究の対象とした諸言語（スライアモン語、ヌートカ語、ニティナト語、エスキモー語）は語形成が非常に複雑な言語であるため、形態素分析情報を加えることによってもたらされる付加価値は非常に大きい。また、テキストにおける用法をもとに語彙データベースを構築し、相互にリンクさせた。本研究を進める上で蓄積されたデータ収集、処理、分析に関する研究手法・技術上のノウハウは記述研究

に取り組む研究者を対象としたワークショップなどの形で研究者コミュニティーとの共有を図った。

本研究で対象とした言語は消滅の危機に瀕した言語であり、また蓄積されたテキストコーパスは急速に失われつつある伝統文化の知識を含んだものである。したがって、本研究での成果は、言語研究の貴重な資料であるばかりでなく、人類学・民族学・歴史学的研究などの広い範囲の研究にとっても価値があり、さらに、現地話者コミュニティーでの教材開発など、言語再活性化活動などにも実質的で重要な貢献といえるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- 1) Toshihide Nakayama. "A Survey of Polysynthetic Word Formation in Nuuchahnulth." In: Tugus Kurebito (ed.) *Linguistic Typology of the North*, volume 1. Tokyo: ILCAA, Tokyo U. of Foreign Studies. (査読無) 2008. pp.59-71.
- 2) 中山俊秀. 「品詞分類の悩み」 東京：大修館, 月刊『言語』(査読無) 2008年6月号. 2008. pp.100-101.
- 3) 渡辺 己. 「スライアモン・セイリッシュ語の品詞について-- 特にその名詞と動詞について --」『アジア・アフリカの言語と言語学』(査読有) 第3号. 2008. pp.117-134.
- 4) NAKAYAMA, Toshihide. "Using written records to revitalize North American languages." Osahito Miyaoka et al. (eds.), *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. Oxford: Oxford University Press. (査読無) 2007. pp.91-106.
- 5) 中山俊秀. 「ヌートカ語」中山俊秀・山越康裕編『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ・2』(査読無) 2007. pp.197-228.
- 6) 中山俊秀. 「記述の現場から見た形態論」東京：大修館, 月刊『言語』(査読無) 2007年8月号. 2007. pp.34-41.
- 7) Watanabe, Honore. "Languages of the Northwest Coast." Osahito Miyaoka et al. (eds.), *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. Oxford: Oxford University Press. [Fumiko Sasama と共著] (査読無) 2007. pp.418-441.
- 8) 渡辺 己. 「スライアモン・セイリッシュ語のクリティックについてーその形式的同定のための基準ー」『アジア・アフリカの言語と言語学』(査読有) 第2号. 2007. pp.115-130.

- 9) Kumiko Ichihashi-Nakayama. "Languages of the South-West United States." Osahito Miyaoka et al. (eds.), *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. Oxford: Oxford University Press. [Yukihiko Yumitani, Akira Yamamoto と共著] (査読無) 2007. pp.460-474.
- 10) 永井佳代. 「シベリア・ユピック語」中山俊秀・山越康裕編『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ・2』。(査読無) 2007. pp.159-195.
- 11) 中山俊秀. 「品詞についてーあるから見えるのか, 見ようとするから見えるのか」峰岸真琴編『言語基礎論の構築へ向けて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。(査読無) 2006. pp.93-107.
- 12) 永井佳代. 「シベリア・ユピック語の接尾辞-u について」庄垣内正弘先生退任記念論集『ユーラシア諸言語の研究』「ユーラシア諸言語の研究」刊行会。(査読無) 2006. p.105-122.
- 13) 永井佳代. 「シベリア・ユピック語の正書法についてー表記法の変遷と現在の状況ー」塩原朝子・児玉茂昭編『表記の伝統のない言語』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。(査読無) 2006. pp.43-164.

[学会発表] (計 15 件)

- 1) Toshihide Nakayama. "Initiative for building an infrastructure in support of language documentation." First International Conference on Language Documentation and Conservation. 2009. 3. 13. University of Hawai'i, Manoa
- 2) 中山俊秀. 「言語ダイナミクス科学のめざすもの」. 重点共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論ー「語」の内部構造と統語機能を中心に』平成 20 年度第 1 回研究会. 2009. 1. 31. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 3) 中山俊秀. 「今どきの品詞分類ー議論の出発点として」日本言語学会第 136 回大会ワークショップ『言語の構造的多様性のなかでの品詞分類』. 2008. 6. 21. 学習院大学.
- 4) Honore Watanabe. "Causatives in Sliammon Salish," 18th International Congress of Linguists. 2008. 7. 21. Korea University, Seoul, Korea.
- 5) 渡辺己. 「スライアモン・セイリッシュ語の名詞と動詞の分類について」, ワークショップ「言語の構造的多様性のなかでの品詞分類」日本言語学会第 136 回大会. 2008. 6. 21. 学習院大学.
- 6) Toshihide Nakayama. "Anatomy of Polysynthetic Word Formation in Nuuchahnulth." Department Colloquium. 2007. 10. 23. Department of Linguistics, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig, Germany.
- 7) 中山俊秀. 「ヌートカ語における名詞化」. 重点共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論: 記述的研究コミュニティー構築部会』名詞化ワークショップ研究会 1. 2007. 6. 24. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 8) 中山俊秀. 「ヌートカ語における『所有者上昇構文』」. 『世界の諸言語における態 (voice) の類型論的研究』プロジェクト研究会. 2007. 3. 10. 国立民族学博物館.
- 9) Toshihide Nakayama. "Characteristics of Nuuchahnulth polysynthesis." Annual Meeting of the Society of the Study of the Indigenous Languages of the Americas. 2007. 1. 4-7. Anaheim, CA.
- 10) Honore Watanabe. "Filler As a Criterion for Formal Identification of Proclitics in Sliammon Salish." 10th International Pragmatics Conference. 2007. 7. 10. Goteborg University, Goteborg, Sweden.
- 11) 渡辺己. 「スライアモン・セイリッシュ語における名詞と動詞について」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所重点共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論ー「語」の内部構造と統語機能を中心に』平成 19 年度第 1 回研究会. 2007. 6. 30. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 12) 中山俊秀. 「言語学でのフィールドワーク」. フィールドサイエンス・コロキウム第 1 回『フィールドサイエンスの手法構築に向かってー臨地研究の実践と理論』. 2006. 12. 6. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター.
- 13) 中山俊秀. 「人間言語の多様性ーヌートカ語の挑戦」. 招待講演. 2006. 10. 27. 札幌学院大学.
- 14) 中山俊秀. 「ヌートカ語における名詞化」. 重点共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論: 記述的研究コミュニティー構築部会』平成 18 年度第 1 回研究会. 2006. 7. 15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 15) 中山俊秀. 「ヌートカ語の語形成の特徴」. 重点共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論ー「語」の内部構造と統語機能を中心に』平成 18 年度第 1 回研究会. 2006. 6. 3. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

[その他] (計 1 件)

- 1) 中山俊秀. ラジオ番組出演. ニッポン放

送「日本人の底力」. 2008. 1. 20, 5:30-6:00.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

・中山 俊秀 (NAKAYAMA TOSHIHIDE)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：70334448

(2) 研究分担者

・渡辺 己 (ONORE WATANABE)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：30304570

・中山 久美子 (NAKAYAMA KUMIKO)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：40401426

(3) 連携研究者

・永井 佳代 (NAGAI KAYO)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：00422907